

学会のミッション

伊藤 雅 英

(筑波大学)

日本光学会は設立以来、日本の光学研究、光産業の発展とともに歩んできました。光学技術は世の中に広く浸透し、いまやわれわれの生活に欠くべからざるものになっています。それとともに本会の網羅する範囲も基礎分野から産業応用まで幅広くなり、設立以来60余年の過程の中で、社会や科学技術・学術分野の要請に応じて変遷してきました。それは常に進取の精神を持って活動を展開してきた証といえますが、長い年月のうちに、良くも悪くも、柵のようなものを纏ってきてはいないでしょうか。親学会である応用物理学会の傘下に守られ、学会としての意味を真剣に考えることを怠っていたということはないでしょうか。

筆者は会員になって30年以上たちますが、時代が変わったとはいえ、先人たちはいつも、光学会のあるべき姿について熱い議論をしていたのを憶えています。当時の現役の方々第一線を退き、これからの学会の発展をわれわれが担っていき、そして今、次の世代にバトンをわたすのがわれわれの責務でしょう。この機会に光学会のミッションについて改めて考えることは、日本光学会のさらなる発展のために有益であると思います。

学会の場というのは、会員の方々それぞれの所属や立場を超えて、中立で独立したものです。そして、所属する学会に対して能動的に運営に携わり、その意義や役割について議論しながら在り方を再構築していくことは、会員自身のつとめです。一方、学会側のミッションは、情報の集約と発信の場を提供することでしょう。この場に来れば新しい情報が得られる、ここにいないでは新しい情報に乗り遅れる、というように新技術や新提案を議論して、新しい学問分野や産業の核を作り、またそれを発展させていく場所だと思えます。また、現在課題となっている産官学の求める人材像の違いについて、それぞれの枠組みを超えて議論をし、分野の発展に資する人材育成を共に目指すことも大切なことでしょう。

本会では、会誌「光学」でも多様なテーマを取り上げ、幅広い分野の情報を会員に提供してきました。しかしながら、そうした関連分野の学会と積極的に協働し、新しい議論の場を提供するという努力は、十分ではなかったように思います。国内外の関連学会との結びつきを深め、他分野とも協力して新しい学問分野や産業分野を牽引することも、これからの学会の重要な役割です。また、本会は企業所属の会員が多いという特徴をもっています。そうした強みを生かし、他の学会にない会員サービスを行うことも可能でしょう。

「世界の変化を望まない人は、世界の存続を望まないことになる」。オーストリアのジャーナリスト、アルフレート・フリート(1864-1921)の言葉です。